

VARÓN DE DIOS

(神の人)

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団
九州教区 壮年部 2025年8月

九州教区壮年部員の皆様、暑中お見舞い申し上げます。いかがお過ごしでしょうか。最近は「こんにちは」と言う代わりに、「毎日暑いですね」と言う挨拶になり、各地で40度を越えて、「異常気象」が普通になっています。

もうすぐ8月15日を迎えます。教団ではこの日を「信教の自由を守る日」と定めています。終戦記念日でもあります。



さて「トラトラトラ」という映画をご覧になった方もいらっしゃると思います。1941年12月8日に日本海軍がハワイの真珠湾（パールハーバー）を奇襲攻撃したことを題材にした映画です。「トラトラトラ」とは、「奇襲攻撃が成功した」という意味です。

淵田美津雄は、日本がハワイの真珠湾攻撃を行った時の総指揮官でした。「トラトラトラ」という信号を日本へ送ったのは淵田です。

さて日本が敗戦になり、1945年9月にアメリカ戦艦「ミズーリ」で、最高司令官のマッカーサーによる降伏調印式にも、淵田は立ち会っています。彼は正直な人で、真面目で、正しいと思うことには命をかけ

ても従う、素直さを持った軍人でした。



淵田美津雄

戦争が終わり、彼はC級戦犯として軍事法廷に召喚されました。戦争に勝った国が、負けた国を裁く一方的な欺瞞に満ちた裁判に、腹を立てた淵田は、何かしっぺ返しの手はないものかと、アメリカに対して反感を燃やしていました。そのため淵田は、アメリカの日本人捕虜に対する虐待の証拠を得ようと、アメリカから帰国した日本人捕虜たちに話を聞くために、臨時収容所まで出向きました。アメリカでの捕虜の扱いは寛大であったと言っても、捕虜はお客様ではないわけですから、やり方は違っても、非道な虐待の事実は日本軍のそれと五十歩百歩でした。淵田はそれらをメモしていきました。

すると思いがけない話を聞きます。臨時の収容所に20人ばかりの義手や義足の傷痍の人が固まっていたのですが、その内の一人が淵田に話しかけて来ました。「私たちはユタ州のキャンプにいたのですが、私たちはみんな、恨みつらみや憎しみを、水に流して帰ってきました。」と言いました。

その人たちはみんな、手を失ったり、足を切ったりの重症者でした。彼らは捕虜病院に収容されていました。終戦の半年前ほどになった時、そこに年齢が20歳ほどの女性が現れました。彼女は懸命に奉仕をして、「何か不自由なこと、欲しいものがあたら何でもおっしゃってください。何でもかなえてあげたいと思います。」と言いました。

最初これを聞いた日本人捕虜たちは、突拍子もないヤンキー娘が現れたのは、何か他のたくらみがあったことだと思った

のですが、2週間、3週間と続くうちに、この女性が親でも及ばない本当の看護をしているということが分かりました。捕虜たちは心を打たれ、その訳を彼女に聞きました。「お嬢さん、どういうわけでこんなに私たちに親切にして下さるのですか。」この質問に、始めは言葉を濁していた彼女でしたが、ついに問い詰められて答えました。「私の両親が、あなた方日本兵によって殺されたからです。」

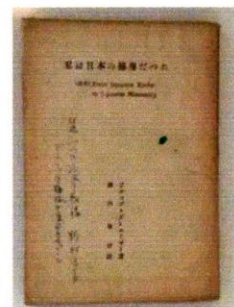
この話の内容に淵田はびっくりして、詳しく話を聞かせてもらいました。彼女の名前は、マーガレット・コベルといい、その両親は日本に遣わされたバプテスト系の宣教師でした。神戸や横浜に滞在し、横浜ではミッションスクールの関東学院でチャプレンをしたことがありました。平和主義者で、戦争反対を唱えていました。

日米関係が危うくなり、家族はフィリピンのマニラに移りました。そしてマニラが日本軍の手に落ちると、ルソンの山に隠れ、3年間は無事に過ぎたのですが、その後隠れ家が日本兵に見つかり、所持品の中にラジオ受信機が発見され、日本兵たちは彼らをスパイと考え、その場で2人の首をはねました。両親の死を知ったマーガレットは、悲しみ、日本兵に対する憎しみで腹がちぎれるほどでした。しかし現地のアメリカ軍の報告書に、両親が両手を縛られ、目隠しをされ、日本刀の下に引き据えられながらも、二人は心を一つにして、熱い祈りを捧げていたというのです。彼女は、両親のこの祈りが何であったのかを思ってみました。そして「憎い日本人に対して、憎しみを返すべきではない。」と思いました。仇のような日本人に対してこそ、両親の志を継

いで、イエス様を伝える宣教に行くべきであると思いました。すぐに日本に行くことはできませんでしたが、自分の住んでいる町に日本人の捕らえられている病院があると聞いて、そこでソーシャル・ワーカーの名義で働くようになりました。彼女は6か月間、一日も欠かすことなく、イエス様のことばに従って、かつての敵に奉仕する彼女の心には、喜びさえありました。

日本ではありえない考え、あり得ない行動でした。「仇討ち」なら分かりますが、親が殺されたから、その仇に親切を尽くすなどは、まるで嘘のような話です。日本では不可能なことを、可能にしたコベル宣教師夫妻の祈りは、いったい何だったのか、淵田にはいくら考えても分かりませんでした。しかしこの話は、淵田の胸を激しく打ちました。やはり、憎しみは憎しみを生む。憎しみに、終止符を打たなければならない。彼は捕虜虐待の調査を止めました。

そのころも淵田は、占領軍司令部から呼び出されていました。1949年12月に呼び出された彼は、渋谷駅で下車しました。その時駅前の広場で、一人のアメリカ人が



小冊子を配っていました。その表紙には「私は日本の捕虜だった」とあり、アメリカ軍の伍長の写真が載っていました。それを読んで、淵田は興味を持ちました。写真の

私は日本の捕虜だった伍長が東京初空襲のドーリトル爆撃隊の爆撃手、ジェイコブ・デイシェイザーと知ったからです。日本軍がハワイを奇襲攻撃した時、アメリカ西海岸のある陸軍航空隊で、炊事当番で働いていた

一伍長が「ジャップ、やりやがったな。俺も仕返ししてやるぞ。」と敵対心を燃やし、やがて爆撃隊に参加します。その彼がデシエイザーでした。彼の両親はクリスチャンで、幼い頃はイエス様の話を聞くのが好きでしたが、高校で「聖書は真理ではない」という先生の話をして信じてしまいました。そしてキリストから離れてしまいました。

高校を卒業した彼は、農業と羊飼いで貯めたお金を元に七面鳥を飼ったのですが、相場が下落して元金まで失ってしまいました。そこで彼は陸軍に入り、伍長になって炊事当番をしていた時に、突如ラジオで真珠湾攻撃の惨劇を聞きました。日本海軍によるだまし討ちと聞いて憤激した彼は、日本に対して何か復讐してやろうという敵対心を燃やすようになりました。



そしてある日、上官から重要な任務があると勧められ、日本に仕返しができる絶好のチャンスと考えて、日本爆撃部隊に志願しました。いろいろないきさつがあっ

デシエイザー て、彼の乗った爆撃機は大分遅れて発進し、名古屋を爆撃したのですが、燃料切れのため予定されていた中国軍の飛行場に着陸できず、ついに日本兵の捕虜となりました。

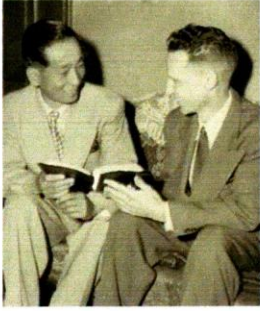
収容所では虐待が続き、彼は気が狂うほど日本人が憎くてたまりませんでした。そして憎さが絶頂に達した頃から、彼はなぜか「人間の憎しみの原因」について思いめぐらすようになりました。憎しみの原因について考え始めたのです。そして子どもの時、「人間の憎しみをまことの兄弟愛に変えるのが、イエス・キリストである。」と聞かされたことを思い出しました。本当にそ

うなのだろうか、そう思うと、不思議なことに聖書を読みたくくなりました。しかし看守にいくら頼んでも、聖書は差し入れてもらえませんでした。だがデシエイザーは、聖書につかれた気狂いのようになって、毎日「聖書、聖書」とねだったのです。そのおかげでようやく聖書を手にしましたが、3週間だけという期限条件付きの差し入れでした。

デシエイザーは、「イエスを信じる者には、永遠のいのちを与える。」という神の約束を知って嬉しくなり、自分が救われ、罪が赦されるように祈りました。そして「自分の口でイエスは主であることを告白し、自分のところで、神が死人の中からイエスをよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われる。」という箇所を読んだ瞬間、自分も救われると固く信じるようになりました。彼は別人に生まれ変わりました。

彼や彼らの仲間を飢えさせ、殴りつける日本の看守を見た時、デシエイザーは、彼らに対する憎しみが慈愛へと変わっているのに気が付きました。「日本の看守がイエスの中にいないのだから、残酷であるのが当然である。」と考えるようになったデシエイザーは、残酷な彼らを兄弟として眺め始めました。そして看守たちも、彼の変化に気づきました。あの箸にも棒にもかからなかったデシエイザー伍長を変えたのが、聖書であるということが分かったのです。約束の3週間が過ぎたのですが、看守たちは聖書を彼から取り上げようとはしませんでした。

その後、デシエイザーは1945年8月にアメリカの落下傘部隊によって救出され、神学校に進み1948年に日本に来て、大阪で宣教の働きをしていました。



淵田とデシエーザー

そのような物語の書いてある小冊子を読んだ淵田は、なぜか聖書を読みたくなりました。聖書を手に入れ、分かりにくいところもありましたが、躓かずに先へと読み進みました。

ゴルゴダの丘に、十字架が3つ立てられたことも初めて知りました。そしてその先を読むと、ルカ23章34節に「かくてイエスは言い給う、父よ、彼らを赦したまえ、その為す処を知らざればなり」「父よ、彼らをお許し下さい。彼らは何をしているのか、自分で分からないのです。」とあります。淵田は「ああ、分かった。」と、うなづきました。マーガレット・コベルの両親の最後の祈りの意味が分かったのです。「父なる神様、今日本の兵隊さんたちが私や妻を殺そうとして、日本刀を振り上げていますが、この人たちを赦してあげて下さい。この人たちは何をしているのか、分からずにいるのです。」この祈りが、娘のマーガレットに伝わったのです。

淵田は、この事件がアメリカではなく、日本であったらどうだろうと考えました。日本なら歌舞伎でやっている通りで、「この恨み、はらさないでおくべきか。」となる。だから親が殺された子どもたちは、かたき討ちに出かけ、首尾よく目的を果たせば、親孝行の美談となる。これでは、まるで桁が違う。

淵田は最初、このイエスの祈りは自分とは関わりのない祈りと考えました。その時彼は、はっとしました。「彼らをお許しくださいという彼らには、お前も含まれているのだぞ。」という啓示でした。

47年間も神を知らないで、神に背を向けて来た私などは、まさしく罪人であった。一般に人々は、罪人だと呼ばれることを嫌う。特に道徳的に行いの高い人ほど嫌う。

淵田はデシエーザーと共に、10年間をかけて北海道から沖縄まで伝道して回ります。さらにアメリカに渡り、各地で説教をして、敵意を克服して平和をもたらす道を説きました。これに対して批判されることもありましたが、「戦争は互いの無知から起きたこと。一方に謝罪を求めめるのではなく、戦争の愚かしさに日本もアメリカも悔い改め、互いに理解し、憎しみの連鎖を断ち切ろう」と呼びかけました。

MM33 について



現在世界中のアッセンブリー教団は「MM33」と言う大きな目標に向かって進んでいます。MM と言うのは Mission Mandate (宣教命令) の頭文字を取ったもので、33 と言うのはイエス様が天に戻られてから 2033 年が、ちょうど 2000 年目に当たるという意味です。

具体的には世界中に 37 万あるアッセンブリー教会を、2033 年までに 100 万にしようという運動です。日本 AG では、
① 教会開拓 ② 健全な教会形成 ③ 世界宣教 ④ 次世代育成 の 4 本柱を立て取り組んでいくことにしています。

広報誌の名前は「VARON DE DIOS」(バロン デ ディオス)です。これはスペイン語で「神の人」という意味です。

九州教区 壮年部担当 松尾 敬文
〒813-0041 福岡市東区水谷 1-14-3
福岡キリスト教会 092-681-5501